

第14回ぎょうだ蔵めぐりまちあるき

www.tabigura.net/

# ぎょうだ蔵めぐりまちあるき

第14回

使って楽しい  
足袋(蔵)くらし

2018

4/21(土)・22(日)

am10:00~pm16:00 (22日は15:00終了)

スタンプラリー受付：足袋蔵まちづくりミュージアム  
(埼玉県行田市行田 5-15) 秩父線行田市駅徒歩3分、  
JR 吹上駅より朝日バス乗車  
「商工センター」「行田本町」下車徒歩3分

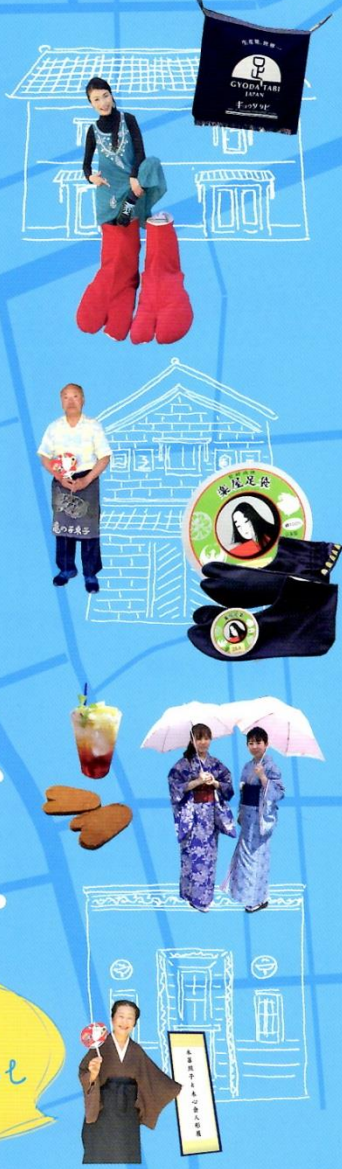
参加券付マップ：大人 200 円/小人 100 円

※足袋とくらしの博物館「無料入館券」や  
「ボンネットバス」無料乗車券付  
※ボンネットバスに乗るにはスタンプラリーの受付が必要です

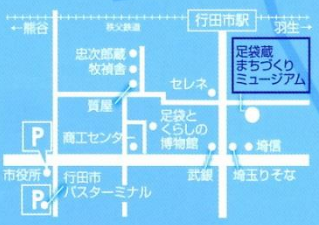
お問合せ：tel.048-552-1010 www.tabigura.net  
主 催：NPO 法人ぎょうだ足袋蔵ネットワーク

【予定イベント】

ボンネットバス運行、人力車体験、手打ちそばの実演販売、藍染体験、アーツ&クラフツ(展示販売)、足袋の製造実演販売、足袋屋横丁、昔遊び体験、ゼリーフライなど飲食出店 他 ※イベントは都合により変更になる場合があります。ご了承ください。



- 当日着物でご参加の方
- スタンプラリー参加費無料!
  - MY 足袋づくり体験 1000 円割引券プレゼント!



NPO 法人ぎょうだ足袋蔵ネットワーク

## 出展者リスト (順不同)

### 牧 禎 舎



### 足袋蔵まちづくりミュージアム



- ・大泉太鼓(和楽器演奏)
- ・行田ゼリーフライ研究会(ゼリーフライ)
- ・昔あそび体験

ほかにも素敵な展示や出店あり。  
場所は当日参加者にお渡しする  
マップにてご案内予定です。

### そのほか

- ・瀬藤貴史(友禅染め)
- ・クラフト木楽屋(木工品、実演)

初コラボ!

「第21回  
熊谷妻沼手づくり市」  
同日開催 !!

蔵めぐりと両方行くと  
何か当たるかも!?

- ・仕立て屋りゅうのひげ(履けない足袋)
- ・関野直美(カリンバ、小枝の鉛筆)
- ・Js.ken System(真鍮やレザーの小物)
- ・つまみ細工と着物地小物(かんざし、和小物)
- ・ピーとろ玉や『甘栗工房』(とんぼ玉、アクセサリー)
- ・ろくろ木工作家(木工芸品、漆工芸品)
- ・籠工房 梟(山葡萄や胡桃の籠)
- ・design & crafts POTS(多肉植物用植木鉢、寄せ植え)\*4/21(土)のみ
- ・図案小物 ponom(ステンシル)\*4/22(日)のみ
- ・record(木の照明・うつわ)
- ・hitoharico みずのよしえ(こざん刺し)
- ・手織り工房志楽(草木染め)
- ・よも山(型染めWS)
- ・クラフト HAGI(木のハーブボックス)
- ・陶 ERIka & お菓子屋 IRIE.  
(陶器、土曜日のみオーガニッククッキー)
- ・筆文字アート(筆文字作品)
- ・大人のじゃがいもハンコ【ポテト工房】(アート、雑貨)
- ・オバケダイガク(町歩き小冊子)\*4/22(日)のみ
- ・Ponto:STAMP(消しゴムはんこ、実演)
- ・MICHINOKUSHA(革・紙の雑貨)
- ・手織り工房 EDIT(服、バッグ)
- ・水玉工房(陶器)
- ・PAZZO-DI-PIZZAIGYODA(ピッツァ)\*4/21(土)のみ
- ・Tarterie PETITE USINE(フランス菓子)\*4/22(日)のみ
- ・豆と野菜(コーヒー、ベジタリアンバーガー、菓子)
- ・野菜時々肉食堂 かんなや  
(古代米マフィン、勾玉クッキー)  
\*4/22(日)のみ



※出展内容は予告なく変更になる可能性があります。ご容赦ください。

●…第14回 ぎょうだ蔵めぐりまちあるき 参加蔵(=スタンプ設置)

■…蔵めぐりP

・AED…足袋蔵まちづくりミュージアム、セブンイレブン

・トイレ…足袋蔵まちづくりミュージアム、牧禎舎、  
足袋とくらしの博物館、牧野本店、中央児童公園、  
ふらっとよぎょうだ、商工センター

※お店、飲食店へはひとことお声掛けください

**レンタサイクル** 利用時間 9時～16時

無料レンタサイクル貸出&返却場所

- ・行田市観光案内所 (JR行田駅前)
  - ・行田市バスターミナル観光案内所
  - ・行田市郷土博物館
  - ・はにわの館(さきたま古墳公園内)
  - ・古代蓮の里売店
  - ・NPO法人さくらメイト事務所
  - ・観光情報館ふらっとよぎょうだ
- ※借りるところと返すところは違ってOKです。

★ボランティア当日→まずは牧禎舎へお越し下さい  
 ・スタッフカード  
 ・ランチ券  
 ・ボンネットバス整理券  
 ・スタンプラリーマップ  
 をお渡しします。



9:45 ミュージアム  
集合  
10:00 スタート



- ① 足袋蔵まちづくりミュージアム(受付)②新町ホットステーション
- ② 今津蔵③田代蔵④足袋蔵ギャラリー“門”
- ③ 大澤蔵⑤松坂屋蔵⑥奥貫蔵“あんど” ■ ボンネットバス乗り場
- ⑦ 行田窯⑧イサミスクール工場⑨小川源右衛門蔵⑩翠玉堂
- ⑪ 十万石本店⑫古蛙庵(モリバン蔵)⑫保泉蔵
- ⑫ 武蔵野銀行行田支店⑬足袋とくらしの博物館(牧野本店)
- ⑭ 牧停舎⑮忠次郎蔵 ■ 旧忍町信用組合店舗

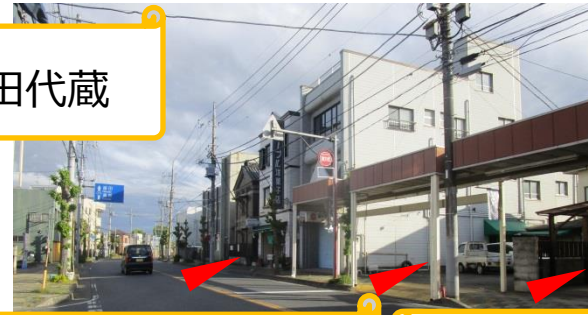
以上全 20 か所



① 足袋蔵まちづくりミュージアム(受付)



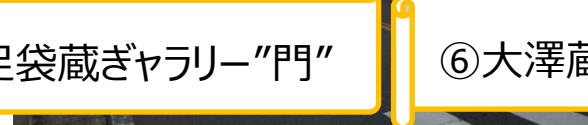
② 新町ホットステーション



④ 田代蔵



③ 今津蔵



⑤ 足袋蔵ギャラリー"門"



⑥ 大澤蔵



⑧ 奥貫蔵"あんど"



⑨ 行田窯



⑩ イサミスクール工場



⑪ 小川源右衛門蔵



⑮保泉蔵



⑬十万石本店

⑫翠玉堂



⑭古蛙庵(モリバン蔵)



⑯武蔵野銀行行田支店



⑰足袋とくらしの博物館(牧野本店)



⑱牧亭舎



■旧忍町信用組合店舗

⑲忠次郎蔵

## 足袋蔵まちづくりミュージアム

『栗代蔵』明治 39 年(1906)の足袋蔵【土蔵】

明治 42 年(1909)には電話が開通。明治 43 年にはミシンの電動化により生産の飛躍的に伸びていきました。生産額が増えると、製品(出荷が本格化する秋まで)をしまっておく倉庫《足袋蔵》が必要になり既存の土蔵の転用とともに、明治 32 年ごろから足袋蔵が敷地内に数多く建てられるようになりました、短棚形の敷地に表から店舗・住宅、中庭、工場、足袋蔵、敷地稲荷が列状に並ぶ行田の足袋商店の典型的建築配置が形成されました。『栗代蔵』は栗原代八商店が明治 39 年(1906)日露戦争後の不景気で、仕事が欲しがっていた職人に造らせたと伝えられている足袋蔵です。この時代は軍用足袋を大量受注したことを契機に、足袋工場建設ブームが起きました。それと共に足袋を保管しておく足袋蔵も多く建てられるようになりました。この足袋蔵を建設した栗原代八商店は文化 5 年(1808)創業の老舗足袋商店で、江戸時代は「松沢屋」と呼ばれていました。「小町足袋」「旗印足袋」の商標で手広く商売を営み、すぐ近くに工場があり、敷地内にも数棟の足袋蔵が立ち並んでいました。《現:足袋蔵まちづくりミュージアム》【蔵めぐりの受付です】



①足袋蔵まちづくりミュージアム  
(行田市観光ステーション)まちづくり情報センター。  
明治39年の栗原代八商店の足袋蔵を活用。





## 新町ホットステーション

### 『新町ほっとステーション』の石蔵

ここは、新町アーケード沿いの裏に佇む新町ほっとステーション。どつしりした石蔵です。行田の「蔵めぐりまちあるき」の日には見学できる場所でもあるそうです。そのルートは○新町ほっとステーションから、あらまちアーケード沿いの今津蔵、足袋蔵まちづくりミュージアム、奥貫蔵(あんど)、武蔵野銀行、牧禎舎、足袋とくらしの博物館、大澤蔵、足袋蔵ギャラリー門、忠次郎蔵、十万石・翠玉堂・保泉蔵、小川源右衛門蔵、旧忍町信用組合、長井写真館、イサミ工場など、あるきまわり行田の古き町並みを親しみます。



**GYODA HOTSTATION**



## 今津蔵

『今津蔵』嘉永年間(1848～1853)の店蔵(土蔵)【文化財】

「今津印刷所」は元禄年間(1688～1703)創業。江戸後～末最古の店蔵

江戸時代の元禄年間(1688～1703)創業と伝えられ、忍藩の藩札の印刷にも携わっていた由緒ある老舗印刷所です。明治以降は足袋の商標ラベルの印刷なども手がけ、足袋産業とも深いつながりを持っています。現在住宅として使われている店蔵は江戸時代後期～末期の建物と思われます。現存する行田市内で最古級の「店蔵」です。庭を挟んで後ろには「味噌蔵」が続いています。店蔵は店舗部分の後ろに住宅部分が繋がり、住宅部分は北川のみ塗り壁となっています。店舗部分から縦一列に部屋が並び、店舗2階には広い窓が開けられています。こうした造りは行田の店蔵の特徴であるようです。店蔵の中には県内最初と言われる明治15年ドイツ製の活版印刷機が置かれています。この印刷機ともども「今津印刷所」は「行田印刷所」として田山花袋の小説「田舎教師」に登場します。また、その当主であった今津徳之助氏は、郵便局、電話、電灯、馬車鉄道など行田の近代化事業に中心的な役割を果たし「行田の渋沢栄一」と言われています。

(有)今津印刷所のホームページ

<http://www.imazu-p.co.jp/history.html>



## 田代蔵

『田代蔵』元田代鐘助商店の大正時代建設の住居と土蔵（足袋蔵）、昭和 2 年（1927）建設の店舗・主屋と土蔵(足袋蔵)の 5 棟

この二階建ての店舗は「きくわ足袋」の商標で知られた田代鐘助商店が、昭和 2 年に建設したもので、一階全面だけが蔵造りになっています。この後ろには大正時代建設の住宅、昭和 2 年と大正時代初期の建設と伝えられる土蔵 2 棟(足袋蔵)が、細長い敷地に裏通りまで一列に並んでいます。足袋産業全盛期の面影を伝える貴重な建築群であると言えます。短冊形の敷地に一列に並んでいるのが特長。



## 足袋蔵ギャラリー“門”

『足袋蔵ギャラリー“門”』と『クチキ建築設計事務所』は「ほうらい足袋」「栄冠足袋」の商標で知られた奥貫忠吉商店の足袋蔵として大正 5 年建てられました。特に後者は 3 階建ての足袋蔵で、元は黒壁でした。Café『閑居』は奥貫家の住宅として、昭和 5 年に建設された高級木造住宅で、奥貫賢一氏(初代行田市長で名誉市民)が暮らしていました。閑静な庭園と一体となって落ち着いた佇まいを醸し出しています。その他明治 43 年建設の足袋蔵も残されています。これら住宅と足袋蔵は現在は、クチキ建築設計事務所、ギャラリー、Café として整備・再生されました。特に『足袋蔵ギャラリー“門”』は絵画展、コンサート等の催しが開かれアート発信の重要な場となっています。



## ようこそ、足袋蔵のまち行田へ



⑦足袋蔵ギャラリー 門  
大正5年建設の足袋蔵を改装したギャラリー。  
不定期ですがイベント等が開催されています。



## 大澤蔵

『大澤蔵(大澤家住宅旧文庫蔵)』大澤蔵は書類などの保管のための文庫蔵です。大澤久右衛門（江戸時代行田町最大の豪商）から7代目の大澤専蔵が、関東大震災で土蔵が破損したのを契機に大正15年に建設したものです。自ら東京の「復興博覧会」でレンガの耐火性をみて、深谷の「日本煉瓦」に相談に行くなど、「レンガ造りの蔵」にこだわったとされています。今も、「行田市の大正ロマンを蘇らせる」市内唯一のレンガの文庫蔵です。行田市では珍しく、表通りに面した蔵だが、両脇に大き目の建物が建っているので見つけにくい。これは大澤家の足袋蔵だという。行田市には足袋に関する蔵や倉庫が非常に多いが、煉瓦造はこれのみ。建材は赤煉瓦ではなく、黒っぽい色の焼過煉瓦。



# 大澤蔵

## ⑪大澤蔵

関東大震災の教訓から大澤商店が大正15年に建設した行田で唯一のレガン蔵（文庫蔵）です。





## 松坂屋蔵

『松坂屋蔵』昭和 24～25 年(1949-1950)倉庫(モルタル蔵)

《「松坂建材株式会社」戦後まもなく創業》

戦後まもなく創業した松坂屋建材株式会社が、昭和 24～25 年頃に建設した倉庫です。当時熊谷にあった軍事施設のボイラー室を解体し、その建材を再利用して建てられたそうです。頑丈な造りの均整のとれた 2 階建てのモルタル蔵で、現在も同社の倉庫として使用されています。





## 大貫蔵”あんど

『奥貫蔵』大正～昭和初期の足袋蔵(土蔵)

“足袋産業の栄華を伝える足袋蔵”

《「奥貫忠吉商店」明治 20 年創業商標:ほうらい足袋》

「奥貫蔵」は奥貫忠吉商店が大正時代～昭和初期頃に建設した足袋蔵です。奥貫忠吉の長男賢一郎は明治 20 年東京日本橋の輸入織物問屋に奉公に行き努力で出世し、やがて貴省し足袋商人に転身した人物です。わずか数年で賢一郎氏は北海道から三陸海岸の広い地域で得意先を広めることに成功しました。自らの顧客の開拓により”問屋を通さずに足袋を直販する方式”です。さらに日露戦争、第一次世界大戦による戦争景気で財を成し、足袋工場を建設するとともに、その商品倉庫としてこの足袋蔵を建設したものです”足袋産業の栄華を伝える足袋蔵”です。





## 行田窯

### 『行田窯』昭和初期の木造倉庫

《荒井八郎商店が昭和初期の頃建設した木造の足袋原反倉庫(足袋蔵)を再活用した陶芸工房です。》

《「荒井八郎商店 商標:穂国足袋」の足袋原料の木造倉庫 現 陶芸工房》

《足袋蔵を再活用した陶芸工房》

木造 2 階建のこの建物は、元は「穂国足袋」の商標で知られた新井八郎商店の足袋原料倉庫で、昭和初期に建設されたものと思われます。同商店の手を離れた後にこの場所に曳家され、東半分が取り壊されましたが、現存する数少ない木造の足袋蔵として貴重な存在です。現在は「行田窯」となっています。



### ⑬行田窯

昭和初期に建てられた荒井八郎商店の二階建ての足袋蔵。市内に残る数少ない木造の足袋蔵です。その一部は陶芸工房として再活用し活躍しています。



## イサミスクール工場

『イサミスクール工場』行田最古の大規模足袋工場。大正 6 年(1917)の木造洋風住宅・大正 7 年(旧事務所)・昭和 13 年足袋蔵(モルタル蔵)明治 43 年に行田電燈株式会社が電気の供給を始めると足袋づくりに電動ミシンが導入され、足袋の生産量は飛躍的に拡大して行きます。この頃に前後して、ノコギリ屋根をもつ大規模足袋工場が建てられ始め、行田の足袋産業は近代産業へと発展して行きました。この工場は「鈴木勝次郎商店」が開設した既存する行田で最も古い大規模足袋工場(現在は被服工場)です。中央のノコギリ屋根の木造洋風工場は大正 6 年、入口右側の旧事務所は大正 7 年にそれぞれ建設されています。そして、昭和 13 年にモルタル造りの足袋蔵が棟上げされています。その他戦前の建物と思われる旧講堂、土蔵、旧寄宿舍、食堂、ポンプ小屋などがあり、戦前の大規模足袋工場の様子を残す貴重な建物群です。開設当時は、おそらく電動ミシンを一挙に多数導入した、最も近代的な量産工場であったと思われます。《「鈴木勝次郎商店」明治 40 年開設の大規模足袋工場。商標:イサミ足袋(歌舞伎の勇み)、現:イサミコーポレーション(被服工場)》



## イサミスクール工場

ノコギリ屋根の木造洋風工場が特徴の  
最も歴史のある大規模足袋工場。





## 小川源右衛門蔵

『小川源右衛門蔵』昭和 7 年(1932)の店蔵(石蔵)

《昭和初期の酒屋さんの石蔵》

《「小川源右衛門商店」明治 17 年(1884)の商品倉庫。現:カネマル酒店》

行田では大正時代以降、土蔵の屋根に洋小屋組みが採用し足袋産業の増加に伴って足袋蔵の大型化を果たし、石蔵やレンガ蔵が建てられるなど蔵にも洋風建築の影響が現れます。小川源右衛門蔵はそうした洋風小屋組(キングポストラス)の蔵の代表例といえる大型の蔵です。小川源右衛門商店(現:カネマル商店)は近江商人で日本酒の小売店として明治 17 年に創業しています。その後、食料品、味噌、醤油なども取扱い幾多の特約店となって商売を拡大して行きました。そして昭和 7 年に大谷石積造 2 階建ての商品倉庫を建設しています。現在も向かい側のお店の商品倉庫として商品倉庫として使用されています。





## 翠玉堂

パン屋『翠玉堂』昭和4年(1929)の町屋

《山田三之助の店舗(山田荒物店) 現:天然酵母パン屋》

《町屋を再活用したアートな。パン屋》

この木造2階建ての商家は、日用品、雑貨、たばこなどの販売をしていた山田三之助氏の店舗(山田荒物店)として昭和4年に建設されましたが、この店は平成7年頃に閉店されています。平成12年喫茶「味蔵」平成20年「翠玉堂」が開業しています。翠玉堂は歴史ある建物を生かして個性的な商売を展開しながら、若手芸術家のアートイベント、展覧会などに利用しています。

今 SNS で話題になっている大注目のパン屋さんがあることをご存知でしょうか？埼玉県行田市にある「翠玉堂」は、レトロな雰囲気が素敵な、一見"普通"のパン屋さん。しかし、なんと、ギャグとしか思えないようなクレイジーな総菜パンを本気で作って販売しているんです！そんな翠玉堂のおもしろ作品、どうぞご覧ください！





## 十万石ふくさや本店

『十万石ふくさや行田本店店舗』明治 16 年(1883)の店蔵(土蔵)  
《国登録有形文化財》

この店舗は元:呉服商山田清兵衛商店の店舗として、明治 16 年(1883)に棟上げされた店蔵です。山田清兵衛商店は江戸時代後期の文政 6 年(1823)にはすでにこの地で呉服商を営んでおり、この店蔵を建設したのは 11 代:山田清兵衛(伊三郎)でした。建物は完全な土蔵づくり 2 階建てで、行田では珍しい東京(江戸)の面影が見られる重厚な店蔵です。今の原型は昭和 53 年に改装されたものです。その後、昭和 29 年ナイロン靴下が発明されると、た行田の足袋産業は服装の洋装化とあいまって、翌年から足袋の需要は急速に落ち込んでゆきました。行田の足袋業界は被服、靴下、ハップサンダル、地下足袋など各種繊維産業へと転換していきました。服装の洋装化の進行によって、その後も足袋の需要は減少を続けました。足袋産業の衰退とともに足袋蔵の建設は昭和 32 年で途切れ、商品倉庫としての役割も終えて遊休化して行きました。その一方で、昭和 53 年には『十万石行田本店店舗』のように建物のもつ歴史的風格を商業活動に生かした店舗も現れ、昭和 50 年代には、足袋蔵の再活用が議論されるようになりました。





## 古蛙庵(モリバン蔵)

### 『森家土蔵』

武士から転身して操業し、「出世足袋」の商標で知られた森伴造商店の2棟の土蔵造りの足袋蔵です。南側の「古蛙庵」は、佐野屋が嘉永3年(1850)に棟上げた土蔵を譲り受けて、明治35年(1850)にこの地に曳家したもので背、現在は私的な書斎兼民芸館として活用されています。北側の土蔵は明治45年(1912)に森伴造商店が棟上したものです。







## 保泉蔵

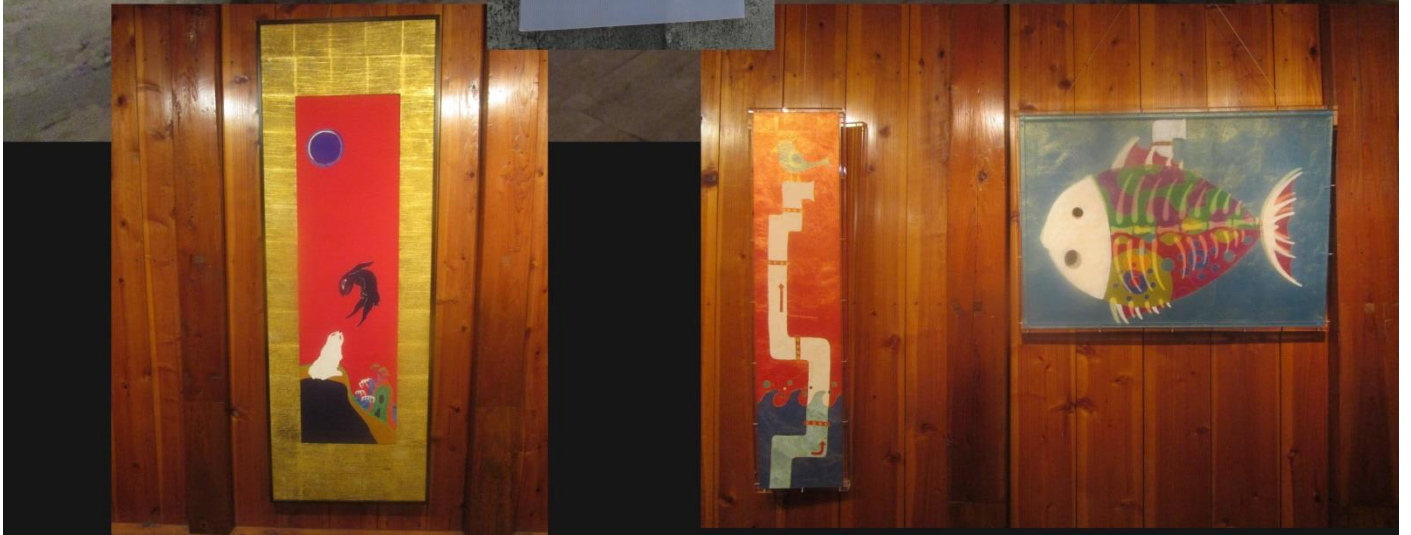
### 『保泉蔵』

《時代による足袋蔵の変遷が理解できる。店蔵、主屋、足袋蔵 3 棟が並ぶ蔵並び短冊型》

・明治 42 年の土蔵(前蔵)・大正 5 年の大型の土蔵・昭和元年の大谷石の店蔵(L 字形の店舗併用住宅)・昭和 7 年の石蔵、モルタル蔵(新蔵)。

保泉商店は足袋原料商として明治 35 年に創業し、明治 42 年に明治後半に建てられたと思われる土蔵(前蔵)を買い取ってこの場所に移転しました。その後足袋産業の発展と共に商売を拡大し、大正 5 年には大型の土蔵を建設しました。さらに第一世界大戦後の不況を乗り切って行田一の足袋原料商に飛躍。昭和元年には大谷石の店蔵(L 字形の店舗併用住宅)を建設しています。その後も昭和 7 年に一番奥の石蔵が、次いで東側にモルタル蔵(新蔵)が建設され、西側の蔵の間が塗り壁で繋がれて、この蔵並びが完成しました。一代で築いた創業者の保泉近蔵氏は託児所(現在の若葉保育園)を建設するなどの社会福祉活動にも尽くしています。





## 武蔵野銀行行田支店

### 『武蔵野銀行行田支店』

昭和9年(1934)の店舗《足袋のまちを支えた銀行建物》

この建物は昭和9年、忍貯金銀行の店舗として建てられたものです。彫りの深い近代復興式の鉄筋コンクリート造り、外壁は当時流行のスクラッチタイル貼りの本格的な銀行建築です。戦時中の銀行統合で昭和19年に行田足袋製造販売会社へ売却されました。昭和21年には昭和天皇が巡幸の際に立ち寄り、2階の貴賓室で食事をとっています。昭和25年から「足袋会館」となり、そして昭和44年に「武蔵野銀行行田支店」となって現在に至っています。幾多の変遷をへて足袋のまちを支え続けた行田を代表する近代化遺産です。

国道125号線の〔新町一丁目〕交差点の角地に建つ。

ここは忍藩の高札場の跡地である。支店の建物はコンクリート造りだが、壁面にはタイルが貼られている。壁面と開口部（窓と玄関）のバランスが心地よい。正面の軒下にデンティル、その下に帯状に配置した、植物の装飾、入口の上部には左右にメダリオンと端正な意匠がさりげなく施された逸品だ。



## 『牧野本店』

足袋全盛期の典型的な行田の“中規模足袋商店”の様子を伝える貴重な建物群です。足袋とくらしの博物館（旧、牧野本店の工場）当博物館の建物は、元は牧野本店と言う老舗の足袋商店が大正時代後半に建設した工場を整備・改装したものです。牧野本店は、明治 7 年に忍藩松平下総神の家臣であった牧野鉄弥太氏が創業しました。明治維新後、牧野本店は成功を収め、明治 32 年以降明治時代に 3 棟の土蔵を建設するなど、商売を拡大していきました。大正時代中頃には、白足袋の製造を始め、大正時代後半には当博物館の木造洋風の工場\*と西隣の土蔵\*\*を建設、電動ミシンを導入して設備の近代化を図りました。さらに大正 13 年頃には南隣の店舗\*\*\*を建設、昭和初期には当博物館の工場を二階建てにして、現在の姿となりました。明治 32 年(1989)～大正期の足袋蔵工場・大正 11 年(木造洋風工場)・大正 13 年頃(店蔵、土蔵他)行田随一の豪勢な店蔵、木造洋風の工場、土蔵 3 棟が残る。\*大正 11 年 8 月 10 日棟上げ、当時は平屋でした。\*\*足袋蔵、大正 11 年 5 月 23 日棟上げ。\*\*\*大正時代の行田を代表する立派な建物です。牧野本店は「力弥たび」の商標を用い東北地方の呉服店に足袋を卸していました。特に八戸は足袋と言えば「力弥たび」と言われる程独占的に足袋を卸していました。平成 17 年 4 月をもって 3 代続いた牧野本店はその長い歴史に終止符を打ちました。





## 牧禎舎

『牧禎舎』昭和 15 年(1940)の 事務所兼倉庫と工場

「足袋・被服商牧禎商店」昭和 15 年創業 商標：藍染体験工房 牧禎舎

「牧禎舎」は足袋・被服商牧禎商店(ヘキの商標)が昭和 15 年の創業時に建設したノギリ屋根工場と事務所兼住宅です。壁は漆喰仕上げ-土壁貫構造-下見板張りで構成されており落ち着いた戦前の日本屋敷の佇まいを良く伝えております。建設中は日中戦争で創業者の牧野貞蔵氏は出兵、復員後、被服を中心にして牧禎商店を軌道にのせましたが、昭和 50 年代半に商売をたたんでいます。平成 22 年「NPO 法人ぎょうだ足袋蔵ネットワーク」が藍染体験工房として再活用を提案。遺族の方々が「牧禎舎」と命名しました。気楽に本藍染が体験できる施設として好評で新たな観光・生涯学習スポットとして注目されています。

## 牧禎舎



### ⑰牧禎舎

昭和15年に建設した足袋・被服の製造を行っていた  
牧禎商店木造二階建ての事務所兼住宅と工場。  
現在は藍染体験、テイストシェアー工房です。



## 忠次郎蔵

『忠次郎蔵』昭和 4 年(1929)の店蔵(土蔵)

《「小川忠次郎商店」大正 9 年開業 現:そば打ち教室「忠次郎蔵」国登録有形文化財》

足袋原料問屋小川忠次郎商店の店舗兼住宅として昭和 4 年頃に完成(大正 14 年に棟上げ)した、行田最後に建てられたと思われる店蔵です。小川忠次郎は明治 40 年に熊谷で魚商を始め、大正 9 年には行田で足袋原料問屋を開業しています。忠次郎蔵は平成 16 年に『NPO 法人ぎょうだ足袋蔵ネットワーク』の事務所、及びそば店『忠次郎蔵』として活動しています。







## 旧忍町信用組合店舗

『旧忍町信用組合店舗』大正 11 年(1922)建設の木造洋風銀行店舗。  
ルネッサンス風の木造二階建てで屋根と壁面の配色がなかなか潇洒だ。屋根にはドーマー窓が設けられている。元来は、足袋商店主たちが出資して創業した忍町信用組合(地元金融機関)の店舗で、表通りに面していない所あるのが珍しい。足袋産業の発展を支えてきました。かつては新町自治会の集会所として使われていたが、現在は廃屋。しかしながら、間もなく引っ越しが始まるそう。大正ロマン満々、いつまでも残していただきたい行田の資産ですね。







## 行田市指定有形文化財

### 旧忍町信用組合店舗移築・保存修理工事 竣工内覧



平成30年4月

### 行田市教育委員会 ものづくり大学横山研究室

修理前の外観



復元整備後の外観



制作年月日：平成30年4月  
制作著作：ものづくり大学横山研究室  
著作者に許可無く、この冊子を他に転写や改定はできません。  
Copyright © 2018 IOT yokoyama.Lab All Rights Reserved.

#### 1. 建物概要

- 1) 建立年月日：大正11年(1922)8月6日(現在より約96年前の創立)
- 2) 建築用途：信用組合店舗兼事務所(1階：営業室、2階：事務室)
- 3) 建立場所：行田市行田13-31(移転前住所)
- 4) 移転場所：行田市水城公園2335(東側園地)
- 5) 文化財指定：行田市指定有形文化財(2016年12月22日)  
日本遺産「和装文化の足元を支え続ける足袋蔵のまち行田」の構成施設としても認定(2017年4月28日)

#### 2. 構造形式等

- 1) 竣工構造形式：本屋2階建て、下見板コロンナル様式、屋根マンサードトラス形式(隠屋根は瓦葺板葺、隠屋根は天然スレート葺)、屋根内種方式、ドームウィンドウ付、柱間装置は欄間付両開き扉・欄間付上下窓形式。  
北側下屋平屋建て、下見板コロンナル様式、屋根和小屋形式(屋根は瓦葺板葺)、柱間装置は欄間付引き違い戸・引き違い窓・片引き戸・欄間付引き分け戸。
- 2) 竣工建築面積：92.21㎡
- 3) 竣工延床面積：152.64㎡

#### 3. 建物略歴と修理に至る経緯

旧忍町信用組合店舗は、大正11年(1922)8月6日に竣工した銀行建築である。この種の建築としても、市内に現存する数少ない大正期の洋館となり、「下見板コロンナル様式」の木造建築である。この建物を建設した忍町信用組合は、大正4年(1915)7月に村上義之助ら青年有志によって組織された共済会を母体とし、大正7年(1918)7月26日に金融事業の許認可を受けた後は、有限責任忍町北谷信用組合として業務を開始した。その後、大正9年(1920)4月に有限責任忍町信用組合に改名を行い、更なる事業拡大のために旧行田尋常小学校跡地(行田市行田13-31)に新たな店舗を建設することにしたが、それがこの建物である。なお、建物調査によって棟札が発見され、この建物の上棟が大正11年(1922)4月11日であり、設計監督は吉澤清、請負人棟梁は細谷活平であったことも判明した。建物は本屋と下屋で構成する形態となるが、本屋は1階が営業室・2階を事務室とし、共に間仕切りを最小に備える大部屋形態であった。一方、北側背面の下屋は控室・倉庫・便所で構成され、その用途に応じた間仕切りが設けられていた。

戦後、金融機関再建整備法によって県内の9組合が合併することになり、埼玉信用組合(現埼玉信用金庫)忍町支店となって営業を続けたが、組合組織の改定により、昭和33年(1958)3月31日にこの建物と土地は民間に売却された。その後、賃貸不動産として複数のテナントが入居しているが、恐らくこの段階で内外装を著しく変更する改修が施されたものと考えられる。近年は地域の自治会集会所(新町会館)として新たな活用がされていたが、平成23年(2011)3月11日に発生した東日本大震災以後は、建物の老朽化や耐震強度不足の問題もあり、積極活用が途絶えた状態となっていた。

平成28年(2016)12月22日、この建物の歴史的価値の高さが評価されて行田市指定有形文化財となったことを機に、建物は行田市に寄贈された。市では建きのあるこの建物の保存と積極活用を行うために、水城公園東側園地に移築することを決め、市民や観光客の憩いの場となる休憩所兼集会所として、再生するものとした。なお、今回の移築・保存修理事業は地方創生拠点整備交付金を活用し、国庫補助事業として実施がなされた。

#### 4. 修理と復元整備

移築のための学術調査研究と設計監理は、包括的連携協定を結ぶものづくり大学に委託し、文化財建造物保存再生の専門家でもある横山晋一教授(工学博士)がこれを担当し、1万パーツを超える建物構成部材の破損調査や、建物復元整備のための痕跡調査・文献調査を実施した。そしてこれらの要件を取り纏めた修理工事設計書を基に、移築のための工事施工が平成29年(2017)8月21日より着手され、厳しい工期ではあったが工事関係者は文化財としての品質を保ったきちんとした修理工事を行い、無事に平成30年(2018)3月31日に工事を竣工させるに至った。

なお、復元整備に伴う現状変更要旨は以下となる。

- 1) 本屋マンサード隠屋根を、旧既の天然スレート葺(笠葺)屋根に復元整備する。
- 2) 西側側面後補下屋を撤去すると共に、北側背面下屋を旧既の形状に復元整備する。
- 3) 本屋屋内の後補間仕切り壁を撤去し、旧既の形状に復元整備する。
- 4) 本屋屋内階段を、旧既位置に復元整備する。
- 5) 本屋一階旧営業室内銀行カウンターを、旧既位置に復元整備(推定)する。
- 6) 本屋・下屋の内外装を、旧既の色調に復元整備する。
- 7) 建物の積極活用に伴う建築設備類を、新たに新設整備する。

#### 5. 特筆すべき建物の見どころ

##### ①復元整備された外装色

この建物は同年となる大正11年(1922)4月15日に竣工した、国登録有形文化財深谷商業高等学校記念館と同一の色彩となるが、現存する近代の銀行建築(歴史的建造物)では3緑色に外装を彩る建物は見当たらない。このため、この建物は先に竣工した深谷商業高等学校記念館の外装配色に倣ったものと推測されるが、その理由として以下が想定できる。もともとこの信用組合の発足は行田の基幹産業であった足袋業界を下支えするために設立されているが、恐らく日本経済の父とも称された渋沢栄一氏の指導助言を受け、金融事業の許認可を得たものと考えられる。このため、渋沢栄一氏の支援によって建立された深谷商業高等学校記念館にあやかり、同じく「至誠」と「土滴商才」の精神をこの建物に表すべく、外装を同様の3緑色にしたものと想われる。なお、外装色並びに内装色の色調は、創建当初となる大正期に用いられた色を忠実に再現したものと推定される。

- ※1) 至誠：常に誠実な心を持って、人や物ごとに対して尽くすこと。
- ※2) 土滴商才：正しく立派な心を持って、経営手腕を振るっていくこと。

##### ②本屋隠屋根に復元された葺葺の天然スレート屋根材

修理前の隠屋根は瓦葺板葺となっていたが、調査の結果、創建当初の屋根は天然スレート葺であったことが判明した。我が国で初めて天然スレートを屋根に用いたのは、明治21年(1888)に建立された重要文化財北海道庁本庁舎となるが、日本の近代化を象徴する建築エレメントとしてその後東京駅舎など多くに採用された。しかし、その殆どが文字書が横書きであり、旧忍町信用組合店舗のような葺葺は稀少な施工方法であった。その理由として葺葺は天然スレートの葺き重ねが二枚となるため、雨漏りが生じやすいという欠点がある。このため、今回の復元整備ではスレートが三枚重ねとなる改良手法を執り、小屋裏に雨が侵入しない対策を講じている。なお、今回の建物解体で増築された西側下屋土間の発掘調査を実施したところ、創建当初の天然スレートが埋蔵されていたことが確認された。凡そ70年の時を経て、この時を待っていたかのように我々の前にお目見えしたのである。